

## <討議の柱>

- 1 総合的な取り組みとしての「国語」
- 2 「聞く・話す」の指導
- 3 「読み」の指導
- 4 「書くこと」の指導

## <レポート>

①	課題提起	小山 洋一（屋代南高校）
②	『夜間瀬物語』が生まれるまで～総合的な学習の時間と国語との接点を求めて～	本山 育人（山ノ内西小学校）
③	国語総合での「校歌」学習の取り組み	宮澤 直哉（松川高校）
④	「学校紹介」に関する実践	内本みさ子・三間美奈子・出野牧子（岡谷東高校）
⑤	目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする力を高め合う国語学習のあり方 ～地域の良さをスピーチで伝える学習～	加藤 敬一（西箕輪中学校）
⑥	子ども達とワクワクするような物語教材の学習を ～ペア音読を取り入れて～	篠田 淳（三本柳小学校）
⑦	一人一人の子どもが豊かに読み進める国語の学習はどうあったらよいか	萩原 一義（長小学校）
⑧	小説「羅生門」の試み	石城 正志（茅野高校）
⑨	対話的発想を生かしながら「読む」力を育む指導と評価のあり方 ～古典入門記における「浦島太郎」の学習を通して～	伊藤 栄男（飯田東中学校）
⑩	小論文指導を通して、評論読解力を養う	柳澤 秀樹（長野工業高校）
⑪	～生活・家庭を見つめて～ 山岸東志子・	清水 洋美（小諸東中学校）
⑫	「書けない」という生徒達に生活文を取り組ませて	守谷 勝好（高遠高校）
⑬	聞き書き「仕事」の実践報告	中村 哲朗（篠ノ井高校）
⑭	推敲の力をつける支援のあり方	原 良子（竜丘小学校）
⑮	自分の考えを書き表す力を高めるための指導について ～読書感想文の指導を通して～	太田理恵子（松川中学校）
⑯	2学期特別授業	野沢南高校 国語科
⑰	書くことの表現力を高める指導はどうあったらよいか ～構成段階に目を向けて～	浦野 文（富県小学校）
⑱	文種にふさわしい効果的な表現を行うための相互評価はどの段階でどのように行ったらよいだろうか	小林みさ枝（奈川中学校）

## I 本年度の分科会の課題

新学習指導要領が実施された昨年度は本分科会にも多くの「話す・聞く」に関するレポートが提出された。「伝えあう力」は、もともと1998年の教育課程審議会答申の改善の基本方針「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝

えあう能力を育成すること」をもとに、位置づけられたものだが、今や大流行となり、様々な少年犯罪と学級崩壊の増加など教育困難状況の広がりの中で、現場では歓迎する向きもある。しかしその内実は、国語の学力を、「話す・聞く・書く・読む」という活動の中での、言語の操作性や技能性といった技術としてしかとらえていない、実用主義、言語活動主義の流れに沿うものとなっている。また、これまでの「文学教育」を、「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導」とし、「目的に応じて的確に読みとる能力や読書に親しむ態度を育成する指導を充実させ」ることが強調され、作品の「形象」を読みとることを通して、人間性への深い理解や共感につなげる事にブレーキをかけている。教科書の物語教材は大幅に減らされ、従来、名作として扱われてきた「モチモチの木」「ごんぎつね」等が、各学年の下の最後にある「自分で選んで」で他の教材文とならんで登場し、選ばれない可能性も出てきている。

いみじくも長崎の事件で、長崎家裁佐世保支部の最終審判の決定要旨に述べられている「他者の視点に立って、その感情や考えを想像し、共感する力や、他者との間に親密な関係を作る力」は、今までの国語教育がめざしてきたものではなかったろうか。

このような状況をふまえつつ、子ども達を人間的に成長させ、主体的な言語能力を身につけさせるために、限られた国語の授業の中で、何をどう教えたらいいいのか、ということについて持ち寄られたレポートをもとに研究を進めていきたい。

## II 報告と討議の内容

### (1) 総合的な取り組みとしての「国語」

新学習指導要領の目玉として登場してきた「総合的な学習の時間」。その中では、「読む、調べる、書く、発表する（聞く）」といった諸活動が、一つのテーマに沿って行われてきている。そうした諸活動と国語科の接点を探ろうという視点で②『夜間瀬物語』が生まれるまで（本山 育人 山ノ内西小学校）③国語総合での「校歌」学習の取り組み（宮澤 直哉 松川高校）④「学校紹介」に関する実践（内本みさ子・三間美奈子・出野 牧子 岡谷東高校）の3本のレポートが報告された。

②は、6年生の子ども達が、郷土の歴史を探る中で分かったことをもとに、地名「夜間瀬」が生まれた物語を創作していくという実践。脚本をもとに、紙芝居を作り、音楽の先生に作曲してもらったオリジナルな歌を交えながら発表したというもの。③は、生徒達が自分の学校の校歌を歌えないという現実から出発し、生徒達に自校の校歌についての学習を組織していくという実践。

④では、中学生の体験入学に向けての高校紹介パンフ作り、体験入学時に行う模擬授業で使う学校紹介文の作成、卒業生から新入生にメッセージを残すという3つの実践が報告された。

討議の中では、総合的な学習の時間にかかる時数、カリキュラムの作成等が話題になった。共同研究者の太田先生からは、地域に調査に入り、地域の歴史と地理をとらえさせながら地域の問題をとらえさせていく活動の紹介。また、そうした活動には、テーマやねらいがはっきりしていることの重要性を指摘された。久保田先生からは、教師が教材に感動すること、惚れ込むことの大切さ、また、活動を通して子ども達の郷土にたいする認識がどう変わったのかが知りたいという指摘があった。

### (2) 「聞く・話す」の指導

「聞く・話す」活動への指導という柱では、⑤目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする力を高め合う国語学習のあり方～地域の良さをスピーチで伝える学習～（加藤 敬一 西箕輪中学校）のレポートが報告され

た。これは、人前で話すことに抵抗感を感じている生徒達に地域の自然の良さをスピーチで伝えようという実践である。

討議の中では、「地域の良さをスピーチで伝えよう」という活動の切実感が話題になった。確かに伝える場はあっても、伝えたい中身があるかないかが重要である。言いたいこと、伝えたいことがあって初めて、伝えようという活動が成立する。同時に、基準となるスピーチというものについても、どういうものがふさわしいのかということについても、意見が出された。また、練習と言うことで課題を与えることも大切ではないか。表現力は、技術と相まって育っていくものではないかという意見も出された。

### (3)「読み」の指導

「読み」の指導という柱では、⑥子ども達とワクワクするような物語教材の学習を（篠田 淳 三本柳小学校）⑦一人一人の子どもが豊かに読み進める国語の学習はどうあったらよいか（萩原 一義 長小学校）⑧小説「羅生門」の読み（石城 正志 茅野高校）⑨対話的発想を生かしながら「読む」力を育む指導と評価のあり方（伊藤 栄男 飯田東中学校）⑩小論文指導を通して、評論読解力を養う（柳澤 秀樹 長野工業高校）の5本のレポートが報告された。

⑥は、場面ごとの学習プリントを作成し、範囲を狭くすることによって、言葉の一つ一つを大切にしながら、個々の子ども達が読みを深めていくという学習。ペアを組ませてお互いの音読を聞きあったり、家に持ち帰ってお家の方に感想を書いて頂いたりする活動なども取り入れ、意欲的に学習に向かう子ども達の姿が伺えた。また、学習に使ったプリントを綴じてあげることで、子ども達の学習の記録ともなっていた。⑦も同じように一つの物語を場面ごとに区切り、子ども達から生まれてきた課題を話し合うことを通して、読みを深めていくという実践であった。

⑧は、『羅生門』という教材を通して、高校生に何を教えたいのか、何を考えさせたいのかという問いから出発し、たどり着いた教師の教材観から学習を組み立てた実践。教材にたいする深い教師の読みと熱意を感じさせるものであった。

⑨は、古典学習に初めて取り組む中学生に対し、その入門として『浦島太郎』を取り上げ、グループ学習の中で、現代語訳や話の注釈なしに、話の流れを読みとっていく実践。⑩は、読書経験が少なく、書かれている事柄を精緻に読みとり、自己の問題としてとらえ直す力が欠如している高校生に、評論教材を与え、読解し、小論文を書く取り組みを通して、自ら「問い」を発する力を育てることをねらった実践。長期休業中に課題を出し、添削した答案を素材として授業を組み立てていくという、大変根気のいる実践であった。

討議の中では、教科書の中で少なくなってしまった「読み」の教材を、叙述を大切にしながら丁寧に扱うことの大切さや、「読み」は、「伝える」ための手段の一つではなく、それ自体が学習の目的であるという意見が出された。『羅生門』を巡っては、各人なりの教材観が話し合われ、面白い討議になった。グループ学習については、子ども達の学びの記録、対話の記録を残しておくことが大事であるとの指摘がなされた。古典の扱いについては、中学校でやるべき事を限定して実践した方がよいとの意見もあったが、逆に難しいからと敬遠するのではなく、おもしろさを伝えたいとの意見もあった。また、高校生の読解力については、中学校までの読書量が決定的であるとの意見も出された。

### (4)「書くこと」の指導

「書くこと」の指導という柱では、⑪～生活・家庭を見つめて～（山岸東志子・清水 洋美 小諸東中学校）⑫

「書けない」という生徒達に生活文を取り組ませて（守谷 勝好 高遠高校）⑬聞き書き「仕事」の実践報告（中村 哲朗 篠ノ井高校）⑭推敲の力をつける支援のあり方（原 良子 竜丘小学校）⑮自分の考えを書き表す力を高める～読書感想文の指導を通して～（太田理恵子 松川中学校）⑯2学期特別授業（野沢南高校 国語科）⑰書くことの表現力を高める指導 ～構成段階に目を向けて～（浦野 文 富県小学校）の7本のレポートが報告された。

⑱文種にふさわしい効果的な表現を行うための相互評価はどの段階でどのように行ったらよいだろうか（小林みさ枝 奈川中学校）は、レポーターの急な都合により報告されなかった。

⑩は、小学校低学年の子ども達に「生活を書く」という活動を通して、自分の「生活」や「家庭」を見つめさせようという実践。文字をならい覚えただけの子どもの素直な表現をととても大切にされているのが印象的であった。

⑫は、選択「国語表現」の中で、高校3年生が「生活文」に取り組んだ実践。参考文との出会いから、構想、執筆、そして評価。今の高校生でも、ここまで書けるんだという充実した作品に心を打たれた。⑬は、高校1年の生徒達に、夏休みの課題として、両親又は身近な人に、「仕事」についてインタビューし、その内容を聞き書きとしてまとめさせた実践。生徒達の作品を、1冊の作品集にまとめて生徒達に返している。

⑭は、縄文土器を作った6年生の子ども達が、その体験をもとにしながら絵本作りをする中で、より相手に分かりやすくなるように、自分の表現を見返していく実践。⑮は、読書感想文を推敲する段階で、グループの中で回し読みをし、お互いに感想を書きあうという活動を取り入れた実践。

⑯は、高校2年生の生徒達が、あいさつにまつわる短文との出会いから、フィクションというスタイルを取りながら、自分の体験を短文に創作していくという実践。昨年度のCMをもとにした実践も報告され、大変興味深かった。⑰は、総合的な学習の時間の中で取り組んできた「バンドーラ作り」の思い出を、お家の方に伝えようと考えた子ども達が、メモカードを使いながら、構成を工夫していった実践である。

討議の中では、入門期における作文指導のポイントとして、安心して表現できる教室、何でも言える学級作りが大切であること。子ども達の作品を丁寧に読み、赤ペンなどで、返事を返していくこと。また、お便り等で紹介することで、子どもと子どもをつなぎ、共感する力を育てていくことの大切さが話された。また、「書けない」「書くことがない」という子ども達にたいしては、その子の気持ちにより添って聞き出してあげたり、様々な手がかりを与えてアドバイスするなどの工夫が紹介された。高校生に、生活文や、「生い立ちの記」「聞き書き」等、取り組ませる中で、充実感、達成感が味わえたという報告。10年間、同じ実践を続ける教師集団の熱意なども報告された。共同研究者の太田先生からは、総合学習など長期にわたる活動を、その過程に子ども達の思いも含めまとめていくならば、レポート形式がふさわしいという指摘がなされた。

### Ⅲ まとめと今後の課題

#### 久保田先生のまとめ

久保田先生はまず、時数の削減、優れた教材が姿を消す、活動主義への傾斜等、国語教育の危機が叫ばれて久しい。昨年は、義務からのレポートの9割は、「伝えあう力」のレポートであった。今年度は、各分野にわたり、優れたレポートが寄せられたことをまず評価したい。と指摘された後、今年度の討論を通じて学んだ点を4点述べられた。①我々教師は、まず子どもの声を真摯に聞くことが大事。子どもの本音、内面の声、子どもの生活を知る努力を続けることが今こそ求められている。②深い教材研究に裏打ちされた教材に寄せる教師の熱意。この教材をどうしても子どもにぶつきたいという熱意を感じるレポートが多かった。1つの優れた教材、その教材に出てくる主人公の生き様にふれることが、子ども達の内面を豊かにすることにつながっていく。③級友との共同

追究の価値について言及されたレポートも多かった。学級で、あるいはグループでの討議を経て、共感の世界を広げ、友だち理解やコミュニケーションを深めていきたい。④今、盛んに言われている評価基準を明確にして授業を組み立てなくてはならないと言うことが、逆に授業を窮屈にしたり、教師がそれに追われてしまっている現状がないだろうか。45分の中の評価も大切だが、次の授業、単元全体、1ヶ月後といったより長い目で見るとのさしが必要だろう。評価基準を乗り越える実践も必要だろうし、それを現場の教師に期待したい。

## 太田先生のまとめ

今年度限りで、長野県教研の共同研究者を御勇退される太田先生は、まず、30年以上にわたる長野県教育との関わり、その中で感じてきた長野県教育の移り変わりについて述べられた。そして、中学校教師一筋を貫いてきた中で、子ども達に生活綴り方を実践することにこだわってきたことにもふれられた。さらに、長野県教研は、小中高が共同で開催している唯一の県であること、その意味で大変恵まれた環境であることを指摘し、教科担任制でない小学校と、教科担任制である中学高校の差を埋められないまま今日に至ってしまった、と感慨を述べられた。また、レポートの中で紹介された90年代の高校生の作品集の中に見られる「明るさ」が、今は失われかけている。いったい今の高校生と何が違うのか。小中で、培ってきたはずの表現力が、高校にどうつながっているのか分析する必要性を指摘された。最後に、文章を書くことは、自分を見つめることに他ならない作業。他人のためばかりに書くのは、自分を捨てることではないか。と、現在のスキル中心の作文指導の問題点を指摘された。